

父ちゃん、カシヤカシヤと動き始めた。
ボクは、頭からかぶっている布団をきゅつ
と握りしめる。

「おい、タカシ、走りに行くぞ」

ゆらゆらとボクを揺らす父ちゃんに、フン

と鼻をほらした。

「いつまで寝とるんか、もう、朝やぞ」

「今日は父ちゃん一人で行って」

「なん言いよっか」がバツ。急に布団をはが
されて、冷たい空気がボクを襲ってくる。

父ちゃん、怒っているのか。昨日の二と

を気にしながら、のっそりと体を起こした。

「だけど、父ちゃんは、青色のウインドブレ

ィカーをカシヤカシヤさせて、ニキッと自い

歯をみせた。早く顔を洗ってこい」

朝の五時半。まだ外は暗い。

「ほら。見てみろ」はあー。父ちゃんが息を

吐いてみせた。

「うわっ。息が白くなってる」

「もう、本格的に冬やばい」

昨日の夜、ボクがゲームをしていたら、父ちゃんに注意されて、たまにはいいやろ

と言いつ返しにら、もつと注意されて、思わず、

「バカレって言う、ちやっ」

気まづくほって、そのまま布団に走ったん

だつて、父ちゃん、怒ってはいないのかよ。

ボクらは、いつものように、家の近くの運

動公園まで歩いた。

「もうすぐやほ。駅伝大会は」

「そり、今度の金曜日。なんか緊張するミ」

どの家も、まだしんとしていて、父ちゃん

からなるカシヤカシヤがはろきソ開こえる。

「前を走っている者もんにぴろたソついて、足を

合わせろ。そしたら早よ走れるけん」

でぎるかちや。ボクは、うろた」

右左、右左。隣の父ちゃんに足を合わせて。

右左、右左、右左、トントトン。左右、左

右、左右ミ。あれ？

「あーっ。足がずれた。父ちゃんわざとやろ

左右、左右。白い息を混じらせて、笑う父

こちらの四百字詰め原稿用紙を使って、応募いただくことも可能です。ぜひ活用ください。

郵送応募の際は指定の応募申込用紙を同封のうえ、ご投函ください。

ちゃん。

そうして、運動公園に着いた。朝になる前の公園には、まだ誰もいない。

「今日も、ボクらが一番だ！ ぶふっ、つべ、笑いがこぼれた。」

「なんか、タカシ、嬉しいんか！
「うん、ちよっとなれ」

照明灯のあかりの下で、父ちゃんがストレッチを始めた。ボクも父ちゃんを真似てストレッチをする。

「よし、そろそろ準備はいいか！

公園の入口に植えられている三本のセノキ。薄暗い中に、ぬぼっとしていて、不気味。

ボクらは、セノキの前でスタートのかまえ。一周やぞ。頑張っで父ちゃんについて来い！

ボクは、深くうなずいた。

「いくぞ。よいい、ドンレ」

父ちゃんの合図で、走り出す。

赤ギムの道の上で、スタスタと父ちゃんの軽やかな足音に、パタパタとボクの足音が続

いた。

右左、右左。父ちゃんに足を合わせた。

右左、右左。冷たい空気が、鼻と口から、

たくさん入ってきて、喉ががらがうしてきた。

「よし、いいぞ。その調子だ」

明るい声の父ちゃん。徐々にペースが上がる

っていく。

右左、右左、右ミ左。足がずれ始めた。

いつも同じところで離れてしまう。

ボクの前に、カシヤカシヤいっている父ち

やんの背中。父ちゃんって、やっぱり、父ち

やんなんだな。当たり前前だけぞ。

「タカシ、あと少しだ。ラストスパート！」

気づけば、遠くに三本のセノキの姿が見え

てきた。さらに離れていく父ちゃん。ついて

行かなきゃと思うても、足がついていけない。

走っている間に、朝の光がさし始めていた。

明るくなっている公園に、遠くにはっ

く父ちゃん。の背中が、余計にはっきり見え

た。そして、父ちゃんに大きく差をつけられて

ゴール。

家に帰っても、まだ喉はがらがうだった。

「ボク、駅伝大会、大丈夫かな」

「はんや、毎朝練習をしてきたろうが。自分

の練習が信用できんとか」

「そうじゃないワ」ミ

「はい」と父ちゃんがほうじ茶を淹れてくれ

た。「体が冷えたときは、ほうじ茶」たい

「そう言っ、父ちゃん、ほうじ茶を一口飲

むと、うまか」と声を上げた。

「マグカップから立ち上がる白い湯気は、さ

「きまでの白い息とは全然違う。」

「ボクも一口飲んだ。あ、たかいほうじ茶は、

すう」と喉を通って体中にじわっと広がった。

「父ちゃん、昨日はバカって言っ、てぐめんね

「ほほが」ピンク色の父ちゃんがこっちを見た。

「昨日のことか？そう言えば、朝になつたら、

全部どっかに流れてもうない」

「はんとも言えない温もりは、じりりと少

し、だけ鼻水が出てきた。」